

【博士学位論文 最終審査結果報告要旨】

瀬川博子氏

「終末期の高齢患者と家族における“死の受容”に関する死生学的研究  
— “生きる希望”という観点から考察する終末期医療に対する患者・家族の思い—

2022（令和4）年2月16日

審査委員 山田和夫

審査委員 新村秀人

審査委員 大西秀樹

審査委員 田中智彦

主 査 前川美行

本論文は、終末期高齢患者と家族における“死の受容”という問題を扱った死生学的研究である。高齢かつ終末期患者においても、“死の受容”に導くことが良きことと語られがちな日本の現状に対して、「そもそも死の受容は必要なことか」と著者は鋭い問いを投げかけている。その問いは、父親の死に際して受けた医療への疑問という実体験から生まれたテーマであり、著者は、その疑問に、遺族の体験を聞き取るというオリジナルな実証的手法によりアプローチした。問題の背景を述べた序章から、110 をこえる先行研究にあたって課題を分析した第2章、そして2種類の継続的調査により得られた結果の分析からなる第3・4章、さらに総合考察である第5章により構成されている。

【本論文の要旨】

序章において著者は、キューブラー・ロスの死にゆく過程の5段階説が理想化されたまま、患者を死の受容へと導こうとする日本の医療の現状に対する疑問を投げかけ、「死の受容」が果たして必要なことかと問題提起している。ロス自身が死の受容の理想化に反対していたとの指摘も挙げている。

第2章では、超高齢・多死社会を迎えた日本における終末期医療の現状と課題を文献からまとめ、その課題を研究の背景として、「死の受容」に関する根源的な問いを検証すべく研究目的が設定されている。まず、日本人の死生観と死の受容過程に関する医療における「死の教育」の現状、および終末期医療に関する研究が進んでいない現状を明らかにした。日本では欧米のアドバンス・ケア・プランニング（ACP）推進の重要性が強調されつつも研究者間で混乱が見られることから、日本に適したACPの構築と浸透が課題であると指摘している。次に、その課題の解決のために著者は、家族のケアが重要な鍵であると述べる。日本人の特徴として、家族は患者から「最期まで生きる望み」を失わせかねない病名告知を望まないという研究報告や、認知面など問題が重複する高齢者の意思決定に際して家族の意思が無視できないこと、さらに高齢者が多い高齢患者の家族への精神的ケアが欠かせないことなど、先

行研究を挙げて詳述し、日本人の死生観や家族観を考慮する必要性に言及している。以上のように高齢患者の終末期に求められる医療やケアのあり方を、高齢患者と家族の立場から理解し、「生きる希望と家族の思い」という視点をもって考察するという本研究の目的が明示された。

続く第3章と第4章では継続調査研究として、「一般病棟での看取りを経験した家族」と「緩和ケア病棟や自宅での看取りを経験した家族」各6名の協力を得て半構造化面接調査を実施して質的分析した結果を示し、考察が述べられている。積極的治療を行う場である「一般病棟」と、看取りの場である「緩和ケア病棟あるいは自宅」両群のデータから、死別後の家族の思いへの看取りの場所による影響の差異を検証し、医療・ケアに求められる対応を検討した。両者の結果には大きな差異が見られなかったが、一般病棟群では、告知、特に余命告知に関する衝撃の記憶が最も多く、終末期鎮静の導入に関する経験も家族のこころの痛みとして残っていたことが示された。一方、緩和ケアあるいは自宅群では、医療に対する不満や憤りが最も多く語られ、次に感謝や信頼の語りが認められた。このことから、患者の生きる思いを尊重し、少しでも長く生きてほしいという家族の願いと辛い気持ちに医療者が寄り添うことが望まれると指摘している。すなわち、生を支える視点を持ち、患者・家族の思いに寄り添い続ける姿勢が重要であるとの結論を述べている。

第5章は、総合考察と結論である。ここでは、先の結果と考察を受けて、次のような論が展開された。告知、特に「数字断定」的告知が患者と家族に与える負の影響は大きく、あきらめや無気力などをもたらすものであるとの結果より、生きる意味や希望を失わないようなコミュニケーションの改善と精神的配慮とケアが必要であると提起している。次に、家族に見られた「否認」への対応も重視すべきと指摘する。キューブラー・ロスが述べるように死にゆく過程のすべてで「希望」が存在続けることを引用し、本研究結果からも「希望の維持」が不可欠であると考察している。さらに興味深い語りとして、「生きる希望」が「来世で生きる希望」に変容した事例の存在を挙げている。特定の宗教的背景が存在しない場合でも死別後のつながり、および盆や彼岸における霊の往還等の文化的習俗の背景にある日本古来の心情を抽出できたことから、特筆すべき日本的死生観として述べている。そして、総合考察では、患者や家族への配慮として「最善を尽くす」と伝えてそばにいて生を支える姿勢が現場において求められると著者は強調している。

#### 【審査結果の要旨】

審査では、まず、「高齢患者の死の受容」および「高齢患者家族の死の受容」に改めて問いを投げかけ、家族の思いに焦点を当てて丹念に聞き取り、「当事者」の主観的体験としての終末期医療のありようを具体的かつ立体的に浮かび上がらせることにつながっている点が評価された。次に、病状経過や家族の感情と医療者の言動、そして「死」に対する恐れ等の心の揺れが丁寧な聞き取りにより描き出され、告知の問題と患者と家族の持つ「希望」の意義が実証された点において実証的資料価値の高い論文と認められた。先行研究の選択も十分的確になされており、キューブラー・ロスや柏木哲夫ら、死の傍らに寄り添ってきた研究の

本質を再認識するに至っている点も評価された。

一次審査では、博士学位論文として継続審査に値すると評価され、記述方法やさらなる考察の深化について望まれる視点と修正点が示された。それを受けた修正論文は、短期間で適切な修正がなされたと認められた。最終審査の結果、本論文は先行研究の文献の検討も十分になされ、目的の独創性、方法選択の妥当性、さらに看取りの時にに関する心情へのインタビューという難題を遂行した実証的研究であり、「死の受容」への再考を問いかけた文献として今後の死生学への貢献が期待される論文であり、博士論文として十分に評価できると認められた。

以下、審査の要旨を a)～e) に沿って述べる。

#### **a) 問題意識の明確性、研究テーマ設定の適切性**

著者は、自身の父親の死に際しての疑問をきっかけに、キューブラー・ロスの死にゆく過程の5段階説が理想化されたまま、患者を「死の受容」へと導こうとする日本の医療の現状に対する疑問を投げかけるという問題意識が先行研究により明確化されている。個人的体験を高齢患者の終末期に求められる医療やケアのあり方を考察するという研究テーマに昇華させ、高齢患者の家族の立場からの理解を目的に、「生きる希望と家族の思い」という視点をもって考察するという本研究の目的を明示しており、研究テーマ設定も適切である。

#### **b) 研究方法の妥当性・厳密性**

高齢家族を看取った経験のある遺族を対象として、最期を迎えた場所により、「一般病棟」群と「緩和ケアあるいは自宅」群各6名ずつの協力者に半構造化面接を行い、心情を丹念に聞き取って分析している。質問紙ではなく、インタビュー調査を行うことはこれまでに得られなかった語りをまとめる結果に繋がっており、方法として妥当であり、厳密性が担保されていると認められた。対象者数が少なく、十分なカテゴリーを得られていない可能性が議論されたが、対象者を得ること自体が困難な遺族へのインタビューとして許容範囲と認め得るとされた。さらに、死別後10年以上経過している協力者も含まれているため、記憶の変容ならびに回想バイアスが否定できないのではないかという指摘があった。上記2点に関しては、1次審査の際に指摘があり、指摘通りに「限界 (limitation)」として明記されている。

#### **c) 先行研究検討の的確性**

死生学的研究として十分に的確な先行研究にあたってまとめられており問題はない。1次審査の際の指摘により一部1990年代の文献であったところも修正されている。

#### **d) 論旨展開の一貫性**

問題意識、目的、方法、結果、考察の論文構成において、論旨展開に一貫性が認められ、問題はない。

ただし審査では、家族の語りを分析する際に留意すべき問題として理論的飽和および回想バイアスが指摘された。また、収集された語り・言葉に今一度立ち戻りつつ考察を展開できる可能性が窺えることからさらなる考察および具体的提言など、発展的な考察への期待が述べられた。この点は1次審査における修正希望点でもあり、著者なりの修正がなされてはい

るが、インタビューの言葉や行動の詳細な分析から「生きる希望」の多様な内容を抽出できる可能性が議論され、既存の言葉にまとめることで考察を終えた点が惜しまれた。今後の課題として、患者と家族の持つ多様な「生きる希望」や「死の受容」とは何かという根源的な問いへの探求が期待されることが共有された。

#### e) 研究の独創性および専攻分野の学問研究への貢献

これまで終末期医療における患者の生きる希望に関する研究はなく、「死の受容」をとらえ直す目的で遺族を対象にインタビューを行い、「生きる希望」という視点から検証した本研究は、意義深く独創的であり、今後の死生学分野の学問研究における貢献が十分に期待できる。患者に告知をせず希望を持ち続けて生きてほしいと家族が望んでいることが判明したことは、終末期医療の現場で実感として認められていることを学術的に証明したことにはほからず、本研究の学問的貢献の高さである。

最終審査の論点は特に「死の受容」に関してであった。「死の受容」とはどのようなあり方のことであろうかと審査委員から指摘と問いかけがなされ、「死を受容しないこと」と「死の否認」の比較検討など、より実証的な考察展開の可能性が指摘された。本研究で明らかになった課題として、高齢患者と家族の「生きる希望」を支え「生に寄り添う」ための医療に対する具体的な提言等への探求があり、研究者としての著者の今後に対する期待として共有された。

以上

瀬川博子氏 博士学位論文

「終末期の高齢患者と家族における“死の受容”に関する死生学的研究  
ー “生きる希望” という観点から考察する終末期医療に対する患者・家族の思いー」  
試験結果の要旨

2022（令和4）年2月16日

博士学位論文の最終面接試験は、令和4年1月26日（水）19時半から21時まで、大学院201教室において、福田研究科長の開会の辞の後、前川主査の司会により、公開で実施された。

初めに、申請者から、パワーポイントを使用して論文の概要が提示された。研究動機を述べた「序章」、先行研究にあたって課題を分析し研究の背景と目的を述べた「第2章」、そして「終末期高齢患者に提供された医療と患者・家族の思いに関する継続的研究」という題目で「一般病棟での看取り」群と「緩和ケア病棟や自宅での看取り」群を対象に行われた調査研究を示した「第3章」と「第4章」、そして総合考察と結論を述べた「第5章」の順で発表された。最後に、1次審査の際に求められた修正に関する説明がなされた。発表を受けて、最終論文に関して、各審査委員から研究内容の意義、考察の発展の可能性、今後の課題などについて質疑が行われた。

以上の詳細については、別紙「最終審査結果報告要旨」に記載されているが、発表と質疑への回答から、現代的課題を的確に捉えた意義深い論文であることが認められた。その上で、「終末期高齢患者と家族における“死の受容”とは何か」、さらに「そもそも“死の受容”とはどのようなことを指すのか」と「死の受容」をめぐって議論が活発化した。最終的に、高齢患者と家族の「生きる希望」を支え、「生に寄り添う」ための医療に対する具体的提言等の探求という今後の課題が明確化された。

審査後、5人の審査委員による合議が行われた結果、提出された論文は博士学位論文として十分に価値あるものと評価され、全員一致で「合格」と判定した。

以上